学位（博士）論文　要旨

# ドイツ語における過去分詞形複合形容詞
## ―語形成における統語および意味論的な制約―

野　間　砂　理

広島大学大学院総合科学研究科

# Die Partizip II-Adjektivkomposita im Deutschen
## -Syntaktische und semantische Beschränkungen des Wortbildungsprozesses-

Sari NOMA

Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University

造語論研究は時代のパラダイムを取り入れ、現在まで他分野と同様に発展してきた。例えばWilmannsは、歴史言語学の立場から語源を解明することで語が形成される際の規則性を記述した。それに対しFleischerは、新語が形成される際の規則性や形成された語の構造分析を重視し、ある時代に生産的な造語法の記述に努めてはいるものの、規則化できない現象に関しては通時的観点からの考察を試みている。造語論研究がこうした共時的・通時的観点が相互に作用し合う手法から脱却したのは、Chomskyが提唱した生成文法理論が造語論の分野にも応用されたからである。それまで、Lexikonは例外的項目の寄せ集めであると考えられていたが、Motschは造語においても変形規則が適用され、それによって今後どのような語が現れるかも予測可能になると主張した。その結果、生成文法理論の発展と共に造語論の研究手法も豊かになったが、依然として既存の語のみをもっぱら対象としてきたと言わざるを得ない。とりわけ先行研究に多く見られるのは、既に生成された語の結合方法を分類し、それらを専門用語で名付けるといった方法である。その際、その分類に合致しない不規則的な語類に対しては、新たな専門用語が与えられるか、「語彙的な語類」として考察の対象外となるだけであった。このような分析方法で、いかに語の分類を記述的に試みたとしても、また生成文法を援用して語構造を分析したとしても、それは先に述べたような今後現れうる語の予測には至らない。規則的な語類が特定できたのならば、それに合致しない語類はなぜその規則から逸脱するのかを示さなければならない。さらに、新たに作り出した語にその規則を適用し、それらの語の文法性と非文法性が正しく導かれうるかを我々が検証できて初めて語形成規則と呼べるのではないだろうか。本論文では、一貫して上記の研究手法によって語形成規則を導き出すことを目標とした。

本論文の構成は次の通りである。第1章では本論文の構成を概説する。第2章では造語論が扱う語あるいは形態素を定義した上で、語が文や句と同様に階層構造を成すという観点からSelkirkの仮説およびWilliamsの規則を援用し、語構造の分析方法を提示する。次に、造語論が扱う語創造と造語の区別を明確に記述し、複合と派生という代表的な造語法を概観する。また、複合と派生の境界線上に位置する語類を取り上げ、それらの語類が

どのように造られ、さらにはどの生成段階で既存の語類とは異なる派生過程へと導かれるかを音韻形態的に分析する。こうした分析方法を提示することにより、形態論における課題は、データの分類と記述だけではなく、その生成過程を解明することであり、そうした研究手法が今後新たに造られる語の予測にも繋がることを主張する。

第2章までは形態論が扱う造語論を概説し、実際にデータの分析案を提示するが、第3章から本論文のテーマである過去分詞形複合形容詞の具体的考察に入る。現在有効な正書法に依拠し、一語書きができる複合語を考察の対象とし､その上で、主に共時的観点から先行研究を概観する。当該語類は、近年形態論への関心が薄れていく中で、逆に徐々に生産性が増したため、最近まであまり考察されなかった語類である。その主な特徴としては、文構造から派生し、補部としての前置詞句が過去分詞と結合し、そこに取り込まれる際、前置詞が削除され一語化することにある。そのため、他の複合語とは異なり、統語構造と形態構造の平行性がパラフレーズにより分析されると同時に、第一、第二構成要素間の意味的な透明性が指摘された。形態領域では第一構成要素の品詞や生産性の高い第二構成要素が記述され、語用論ではこれらの語類が用いられるテクスト種が特定された。確かに、複合語がこれほど多領域で取り上げられるのは珍しいが、それ故に個別かつ詳細に扱った研究も少ない。また、この語類が文構造から派生しているということが指摘されているにも関わらず、その派生過程の分析や過去分詞と結合しうる項あるいは付加詞の意味に関する研究は数少ない。以上の各領域における問題点と解決すべき課題を踏まえ、本論文では過去分詞形複合形容詞の第二構成要素である過去分詞の基となる動詞が能動態から動作および状態受動を経て複合形容詞化されるまでの過程に着目し、どのような制限がどの段階で付加され、異なる複合語形成が導かれうるかを分析する。対象となるデータは、筆者がDuden、COSMAS II、Google.deから収集したもので、これらを、項を取り込む語類(A)、付加詞と結合する語類(B)、完全に語彙化された語類(C)の3タイプに分類し、第5、6章で分析する。

第4章では、まず3タイプのデータを統語・意味論的に分析する際の礎となる過去分詞の語彙素性と構造を提示する。次に能動文から受動文に変換する際の統語操作、即ち受動形態素の付与、元の主語の降格、4格目的語の主語位置への移動について議論した後、受動文を形成しうる動詞の主なタイプの一つが達成動詞であることを特定する。続く第4.3章では、語用論および意味論の分野における先行研究を紹介する。当該分野では、過去分詞形複合形容詞が状態受動文の形容詞性を示す論拠として取り上げられている。しかし実際には、能動文から受動文を経て形容詞化されるまで、項構造の交替メカニズムが観察され、このことは当該語類における形容詞性の反証となる。こうした観察事実を踏まえ、次章以降では、当該語類の派生過程を項構造によって統語的に、そして過去分詞と結合しうる項または付加詞の意味を語彙概念構造により意味論的に分析する。

第5章では、状態受動文において過去分詞の最も近くに位置する項が過去分詞に編入される統語的な複合語(A)を扱う。編入の手順としては、前置詞句内の名詞と過去分詞との関係よりも、前置詞句の主要部である前置詞と過去分詞との意味的な繋がりの方が強いので、前置詞が先に過去分詞へと移動する。次に前置詞句の補部であった名詞が過去分詞へと編入される。その際、たとえ文中に付加詞が取り込まれたとしても、その付加詞は過去分詞に取り込まれることは基本的にはない。この統語的操作は、編入時にどの要素も削除されない一般的編入ではなく抽象的編入として解される。この抽象的な編入分析により、前置詞が単独で過去分詞へと移動することで、過去分詞に前置詞の意味が取り込まれるが、前置詞としての効力を失い音韻的に実現されないという現象が説明される。編入という一定の統語的操作によって生成されるこの語類では、複合語の第一構成要素の意味役割が過去分詞によって一つに規定されるため、意味的な透明性は保たれ、文脈の支えなしに意味を認識することができる。さらには、この語類の生産性の高さも、編入という統語的操作の介入によって説明される。

次に第6章で扱う(B)のタイプについては、能動

文から動作・状態受動文への派生過程が切れ目なく観察されるが、形容詞化する際に「道具･場所･原因・様態」など、異なった意味を持つ複数の付加詞と結合するという点で、5章で扱う統語的複合語とは一線を画する。派生過程の考察により、意味論的に動作・状態受動文の形成が阻止される状態動詞、状態受動文への変換のみが回避される活動・到達動詞では形容詞化が必然的に阻止されることが説明可能となる。次に、一連の派生過程が観察される達成動詞についても、無制限に形容詞化が生じることはないため、語彙概念構造による付加詞の取り込みの可能性を検討した。達成動詞では、動詞のアスペクトに基づき動作述語ACTを修飾する付加詞が、動作受動および状態受動をたどり、過去分詞と一語化する。その際、結合しうる付加詞の意味は様態や道具を表すものが一般的であり、場所・動作主・原因については、それらの意味が動詞の項として機能し、さらに文脈の支えも必要となる。このような過程で生成された過去分詞形複合形容詞は、コピュラ構文における形容詞の持つ永続的な性質とは異なり、動詞の出来事が完了した結果、ACTからBEにも結合するThema-Subjektの一時的な質や価値を表す。最後に第6.6章では、能動文から動作・状態受動を経て形容詞化されるまでの過程がブロックされる語類(C)を考察した。この語類では、派生元の動詞との意味的な関連性が多かれ少なかれ希薄になっているため、派生元の動詞とは異なる特定の意味で用いられる、完全に語彙化された語類であると結論した。

以上の分析により、一方では、過去分詞形複合形容詞の語形成において、形態・統語・意味・語用論という多角的な考察が不可欠であるということを主張する。語を対象とした研究が形態論の枠内に留まる必要はなく、隣接分野の知見を取り入れることでその分析手法は豊かになり､その結果､既存の語彙の記述に留まることなく、造語過程における規則性を導き出すことができるだろう。他方では、文と語が密接に関わり合っているという本論文の研究成果は、文およびテクストレベルの研究にも還元できる。さらに、これまで意見の一致を見ないほど煩雑を極める「状態受動文における過去分詞」と「形容詞としての過去分詞」の研究に対し､新たな視座を提供する。当該分野では、これまで当該語類が一義的に状態受動文の形容詞性を示す論拠として用いられてきた。しかし、当該語類は統語的・形容詞的・語彙的という３つのタイプが観察され、とりわけ統語的な語類においては形容詞性を見出すことはできない。今後は形態論を含めて統語論・意味論・語用論の流れがより一層考察対象となることが望ましい｡本研究は、先行研究において看過されてきた形態論の重要性を示すことによって、その方向性に貢献するものである。